



あなたは、この作品をみて、何を感じるだろうか？ 力強さ？ 自由さ？

実はこの作品は、御年90歳を迎える現代書家、荒野洋子さんが制作したものだ。極寒の地、倶知安町で描かれたこの一枚の書が、昨年オープンのホテル「雪ニセコ」に飾られるまでには、様々な人をチームとしてつなぐ、一人の女性の奮闘があった。現在キュレーターとしてご活躍されている細川清映さんのお話から、北海道の作家の魅力について、ご紹介したい。

アートに関わる ・ 作家に関わる ・ 生活に関わる

～ニセコから届けられる北海道アートの価値～

細川さんが現在されている活動について、教えてください

現在は主に、アートギャラリーの運営や展覧会の企画・運営、クライアントの要望に合ったアート作品の提供（コミッションワーク）を行っています。イメージとしては、本の編集者が執筆される作家の先生と連絡を取り合いながら、締め切りまでに作品を完成させるというような調整をするのが近いと思います。例えばタレントのマネージャーのように、さまざまな調整をする役割が多いかもしれないですね。



細川 清映（ほそかわ きよえ）さん

細川清映：北見市出身。小さい頃から絵画教室に通う、美術館に足を運ぶなど芸術に親しむ。当初の進路は美術関係ではなかったが、「アートに関わりたい」という思いから決心し、札幌の美術館で勤務することに。学芸員の資格を取った後、2016年に作家から誘いを受けたことをきっかけに、ニセコにアートギャラリーをオープン。現在に至るまでに15以上のプロジェクトに関わり、北海道のアーティストの作品を発信し続けている。

コミッションワークに関しては、実際に作品を制作する作家自身は表現をするのがお仕事のため、一般的な商品をつくるように、クライアントの希望に合わせた作品を制作しようとは考えていないと思います。そのため私は「こういうものをつくってください」という言い方は作家に対してあまりしらないですね。「この範囲で自由に表現してください」といった感じです。

そのため私の仕事の大部分は、依頼に合った作家や作品を探し出し、それをクライアントに提案することです。雪ニセコの場合は、建物そのものが建築家の方の作品になるので、その中にアート作品を入れるということを意識しながら、この建物にどんな作品が合うのかといったことを、様々な方の意見も聞きながら調整し続けていました。クライアントに対しては、予算もちろんそうですが、建物の設計や照明の配置も含め、色々な調整をしながらいい落としどころを見つけるということをしていました。

その提案のために、100回以上にわたってプレゼン資料を作成しました。その時に伝える作家の情報については、過去の展覧会風景など、イメージのしやすさを重視しています。クライアントも初めは「北海道のアーティストがいい」といったざっくりとしたイメージで来られる方が多いので、どういう作品が良いのかを探りながら、「こういう作家がいますが、こういった作品がよいでしょうか？」といった流れで提案を進めることが多いです。

様々な方と関わり続けることは、大変じゃないかといえば... まあ大変ですね(笑)。私はプロジェクトに関して色々な作家に声を掛けたりしますが、最終的には作家とチームになって、みんなで良いものを作り上げていくという雰囲気なので、なんとか頑張れます。

アートギャラリーの企画・運営に対しては、ニセコという場所で、海外の方を含む多くの人に北海道の作家の魅力を発信しようという想いを持っています。海外の方は、「家の壁が空いていたら何かを飾ろう」といった感覚の方が多く、アートの購入に対するためらいが日本の方と比べて本当に少ないんですよね。そういった意味で身近にアートを感じてくださっている方が多いので、そのような方に北海道の作家を紹介したいなと思って、ニセコでの展示を続けています。

例えば現在、有島記念館のギャラリースペースで開催している「THE BLUE EXHIBITION」については、来てもらった方に日本らしさを感じてもらうためにも、青という色をテーマとしています。



展示作品の説明をされている様子

海外の方の中には、古く歴史ある作品を好まれる方も多いですが、私はそういった作品は現在扱っていません。古物商とは少し違うやり方として、私は現代というものにもこだわりたいと思っています。今回紹介している現代の浮世絵版画作品についても、技術としては江戸時代の技術を継承して制作しているので、その辺をつなぐというか、日本人が、高い技術を継承して今でも実際に作っていることを紹介したいと思っています。

活動の中で、作家とどのようなやりとりをされているかについて教えてください

THE BLUE EXHIBITION は、2023/8/23 - 10/9 まで開催。10/8,9 の二日間は、北海道伊達市出身の藍染め作家「aizome_I」さんをお招きし、藍染ワークショップを開催する。

作家との接点の作り方については色々ありますが、例えばインターネット上で作品をみて、それだけでいいと分かる作家には直接メールを出してみたり、展覧会に足を運んだり、あとは美大生の卒業制作を見に行くとか、本当に色々な方法で作家を探しています。北海道中を走り回っている感じで、**中距離トラックの運転手より走っているかもしれません（笑）**

作家に関わる上で一番大切なのは、やはり信頼関係を構築することです。作品を適正価格以上で販売したりとかはしないですし、うちのアートギャラリーが扱った作品に対してはどこまでもフォローをします。また、何かがあった時には作家に呼ばれることもしばしばあるため、家族ぐるみというか、作家の生活にまで入り込むような付き合い方もします。

例えば荒野洋子さんは 90 歳のおばあちゃんなので、**毎週末の買い物の時に車を出すとか、書を描く紙を切るのを手伝うといったこともしています**。その人のために思って動いていると、ボランティアにも近いような、利益だけでは測れないようなところまでお手伝いすることがあります。一般的には残業できないとかありますが、そういった観点からいえばうちはスーパーブラックかもしれないですね（笑）。もう割り切れないです。他のアートギャラリーの方も同じだと思いますが、作家との付き合いについてはそうなるものなのかもしれないですね。

信頼の構築に関してさらにいえば、私の主な仕事は、作家の作品をクライアントやコレクターに紹介する、中間のお仕事になるので、作家にもクライアントにも偏り過ぎることなく、俯瞰的な視点を持って仕事上のやりとりを進めるように意識しています。私にとってはその両方が大事なので、**お互いの立場を守るためにも、常に責任を持って**

仕事に向き合うことが大切だと思います。クライアントやコレクターについても、作品を所有してもらった場合には、その後一生の付き合いになります。

そのため、クライアントやコレクターのために働くことも多いですね。海外の方だと日本にないこともしばしばなので、代わりに何かお手伝いできることがあればと常に思っています。**具体的な計画としては、近い将来シンガポールで展示ができればと思っています**。荒野洋子さんの書について、シンガポールの方から大きな反響がありました。そこで、シンガポールのコレクターにはお世話になっているので荒野洋子さんと一緒に行きたいと思っています。現在も作品の輸出はしているのですが、北国の作品をシンガポールで見てもらいたいと思っています。荒野洋子さんはもう 90 歳なので、できるだけ早くに行こうと思っています。なにより本人が、行きたいと言ってますので（笑）。**荒野洋子さんの作品をたくさんの方に知ってもらう、その足掛かりになればいいなと思っています**。



荒野洋子作「鶴」(2019年) ※雪ニセコに展示

根本の原動力としては、**やはり北海道の作家の活躍の場を増やしたい**、それに尽きますね。うちのアートギャラリーが有名になるというよりは、北海道の作家に注目が集まるような形を目指して、日々活動を続けています。

荒野洋子：1933 年生まれ。北見市出身。書歴は約 60 年で、膠を混ぜた墨には適温があることから氷点下 5 度以下の環境で作品を制作することもある。本記事 1 ページにある写真は、雪ニセコのメインレセプションを飾る《六華煌》という作品。降り積もる雪が朝日を浴びてきらめく様を表現している。

ズバリ、北海道のアートの魅力とは何かについて、教えてください

例えば荒野洋子さんの、-5℃以下でしかできない書は、北海道だからこそ生み出されるものです。他には、直接的な表現をしているわけではないのですが、国松希根太さんの作品のような、自然の空気感、ちょっとした雄大さを感じる作品とかも、他の地ではなかなか見られないと思います。北海道の作家は小さい頃から住んでいるので気づいていないのかもしれませんが、**やっぱり北海道らしさが作品からにじみ出ている気がします**。今までに見た景色とかを取り込んで作品をつくるという側面もあると思います。例えば高い所からみた広大な土地の雰囲気とかは、そもそも広大な地にいないと分からないと思いますし、東京からその様な作品は出てこないと思わされるような、そういう所が北海道らしさ、魅力だと思いますね。

活動・目標の現在地について、教えてください

いやー、どうなんでしょうね。もうゴールが見えないです(笑)。でもちょうど今、雪ニセコもそ

うですが、首都圏や海外の作品だけではなく、北海道の作家、地元の作家にも注目が集まってきているところだと思います。これを機会に、よりいっそう北海道の作家を紹介できたらと思います。**達成率はまだまだじゃないでしょうか。20%、いや10%いったかくらいだと思います**。まだ先は長いですね。

もちろん海外の方だけではなく、日本の方にも、今まで以上に北海道の芸術を楽しんでほしいと思っています。今の日本では、「そもそも作品って買えるの?」といったように、芸術は鑑賞するものという認識が強いように思います。まずは、私たちの活動について知ってもらい、実際に作品を見てもらうことが大事だと思います。いくらSNSで発信をしても、画面上だけじゃ伝わらないこともアートの場合は多いので、直接見てもらうことが大事だと思います。**実際に作品を見てさえもらえたら、何かしら感じるものはあるんじゃないかと思っています**。

おわりに : “あなた”は何を感じたか?

作品は制作されて8割。鑑賞されて、その反応を受けて作品は初めて完成する—

北海道を代表する作家の一人である国松希根太さんは、そのように言う。果たしてあなたは、記事を通して荒野洋子さんの書や、右の国松希根太さんの作品をみて、何を感じただろうか?“北海道らしさ”は感じられたらろうか?いずれにせよいえるのは、アートは誰に対しても開かれているということだ。“北海道らしさ”にじっくりきた人も、きていない人もぜひ展示まで足を運んでほしい。実際に作品をみれば、新しく感じるものが、何かあるはずだから—
(北海道大学教育学院 修士2年 鴨田祐汰)



木に色を何度も重ね、彫刻のように削る作業を繰り返し、木目を生かした作品に仕上げている。

国松希根太:札幌市出身。飛生アートコミュニティー(北海道、白老町)を拠点に、様々な風景に存在する輪郭(境界)を題材に彫刻や絵画などを制作。祖父の国松登さん、父の國松明日香さんと3代続いて作家として活躍されており、2015年に第24回道銀芸術文化奨励賞を受賞するなど注目を集めている。